

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌 等又は発表学会等 の名称	概 要
1 (学術論文) 大学の講義におけるナラティ ヴの生成・社会的構成と継承 思春期の悪との接触体験の語 り直しを例に	単著	2019年12月	『広島国際大学心理 学部紀要』, 7巻,37-49.	大学の講義において学生が記述する個人的体 験を一つのナラティヴ・物語としてとらえ、それが 体験の理解、自己の形成、および体験のとらえ 直し・語り直しに対して持つ意味、それが成立す るための文脈としての講義の特徴を検討した。講 義は教員と学生(複数)の語りの循環をもたらし、 学生の過去の体験や自己の理解につながる。さら に、思春期における悪との接触をとらえ直す・ 語り直す契機と講義がなりうることから、講義形 式における心理教育の可能性も示唆された。
2 (学術論文) 思春期における悪との接触に 対する青年のとらえ直し(7)～ 悪の文脈としての仲間関係の 多義性・拮抗性・両極性～	単著	2021年2月	『広島国際大学総合 教育センター紀 要』,5号』	大学生の自由記述から思春期の仲間関係にお ける悪の経験について分析を行った。仲間関係 は1)「社会に合わせる」ことは「自分を出せない」 とも言える多義性、2)「接近・傷つきと距離化・淋 しさ」のような拮抗性、3)「周囲に合わせすぎず～ 合わせられない」のはざままで揺れ動く両極性とい う特徴を有し、悪は1')自己主張ともいえる多義 性、2')葛藤の解決(拮抗性)、3')一極から他極 への反動(両極性)のような「負の否定としての 正」の意義を持つことが示唆された。
3 (学術論文) 思春期における悪と Erikson のライフサイクル論－悪の両 義性と5つの negative aspects との関係－	単著	2022年3月	HIU 健康科学ジャ ーナル, 1号, 57-68	思春期における、悪の両義性・拮抗性・両極性を 把握する理論的枠組みとして、Erikson のライフ サイクル論の検討を行った。負の側面には、① 非同調的性向(不信)、②不適応の傾向(感覚的 不適応)、③病理につながる要因(悪性傾向;閉 じこもり)、④環境との負のつながり(偶像主義)、 ⑤前の段階の危機を解消することによる派生物 (時間的拡散)が含まれる。その上で、5つの負 の側面を思春期における悪(不登校、いじめ、学 びからの逃走)と関連づけて考察した。
4 (学術論文) 発達のモラルレジリエンスモ デルにおける成長のとらえ方 ー心的外傷後成長 PTG との 比較ー	単著	2023年3月	HIU 健康科学ジャ ーナル, 2号 31-43	発達のモラルレジリエンス(DMR)モデルの発展 を目的とした。DMR は悪に対して、備え、抵抗 し、影響から回復する弾力性からなる。心的外傷 体験をきっかけとした成長に焦点をあてた心的 外傷後成長(PTG)に関する理論と知見を参照 することにより、DMR の過程を検討した。その結 果、DMR における出来事以前、出来事、過程 (反芻、自己開示・語り、ゆるし・スピリチュアリ ティ)、影響要因、結果・帰結に関する知見と今後 の検討課題を整理した。
5 (学術論文) 日本における悪への対応のた めの道徳的・倫理的枠組みの 構成～文化相対主義と悪の 両義性を考慮した道徳教育の 提案	単著	2023年3月	『広島国際大学総合 教育センター紀要』 7号』, 39-59	日本文化における悪への対応(理解と対処)に ついて、心理学における道徳研究と思想史(仏 教の受容過程)を中心に、哲学、倫理学、社会 学等多様な領域を参照にして、統合的に理解 し、道徳教育の基礎となる枠組みを構成する試 みを行った。